

令和八年度
名寄市立大学
総合型選抜（社会福祉学科）

小 論 文 問 題

試験時間 一〇時〇〇分～一一時三〇分（九〇分）

*受験上の注意

- ① 指示があるまで開いてはいけない。
- ② 指示に従って、静粛に行動すること。
- ③ 机上には、受験票、HBの黒鉛筆またはシャープペンシル（シャープペンシルの芯はケースから取り出したもの）、消しゴム、鉛筆キャップ、鉛筆削り、時計、眼鏡、目薬、ハンカチ、ティッシュペーパー（袋・箱から取り出したもの）以外、不要な物は置かないこと。
- ④ 質問、用便その他、特に必要のある場合は静かに手を挙げ、指示を求めること。
- ⑤ 不正を行ったものは試験を中止し、以後の受験資格を失うものとする。

次の文章を読み、あとの問に答えなさい。

SNSは承認欲求を^か駆り立てる。こういう話になると必ず返ってくるのは、「じゃあSNSなんかやめればいいじゃないか」という意見です。はい、きっとみなさんも聞いたことありますよね。しかし、私にはこうした意見に与^{くみ}することができません。

SNSをやめればいいじゃないか、という意見は、現実の人間関係がSNSと接続していない人の考えです。つまり、SNSがなくても人間関係が成り立っており、友達がいなくならない人の考えです。もしかしたら、SNSネイティブではない世代、具体的にはZ世代（≒1990年代後半から2010年代初めごろに生まれた世代）よりも上の世代の人々にとってはそれが当然なのかもしれません。「人間関係とは、まず現実の社会生活のなかで作られるものであり、SNSはすでに確立された人間関係のなかで用いられるコミュニケーション手段の一つにすぎない。そして、コミュニケーションの手段はSNSだけではないのだから、もしSNSをやめたとしてもそれがすなわち人間関係の解消を意味するわけではない」。そんなふうに考えられていそうです。

しかし、このような考えは、SNSネイティブの世代にとってはほとんど説得力がないものでしょう。なぜなら、そうした世代の人々にとっては「LINEのIDを交換^{こうかん}する」「インスタを相互フォローする」ということが事実上の人間関係の開始を意味するのであり、現実の人間関係とSNS上の関係性を区別することはできないからです。（中略）

私たちは生きていく上で他者からの承認を必要とします。しかし、承認欲求はときとして有害なものになります。では、私たちは「他者からの承認」という事柄^{ことば}に対して、どのような態度をとるべきなのでしょう。自分の承認欲求をどのようにコントロールしていけばよいのでしょうか。

実はこの問いは、SNSが登場するずっと前から、哲学の世界では大問題として論じられてきたものでした。ここでひとりの哲学者を召喚^{しょうかん}したいと思います。近代ドイツの哲学者、フリードリヒ・ヘーゲル（1770・1831）です。彼は、主著『精神現象学』^{かれ}のなかで、人はどのようにして自分自身を確信するのか、と問いかけました。

「自分自身を確信する」とは、言い換えるなら、自分に関して漠然^{ばくぜん}としたイメージを持つだけではなく、「よし、これが自分なんだ!」と自信を持って断言できるような、そうした状態になることです。ヘーゲルによれば、人間は自分ひとりでは自分のことを確信することができません。そうした確信を得るためには、他者から承認されることが必要なのです。

たとえば、まわりの人が「私」を「キラキラした人」として承認するとしみましょう。すると「私」

は、そのように承認されることで、自分が「キラキラした人」だということを確信します。ところが、そのように確信することは、同時に「私」を疎外された状態に陥らせてしまう、と彼は言います。なぜでしょうか。

理屈は単純です。この場合、「私」は他者からの承認に基づいて、自ら「キラキラした人」であろうとします。実際には「キラキラした人」としてではない生き方もできるはずなのに、まわりの人から認めてもらえる「キラキラした人」を演じようとするのです。このとき「私」は、「キラキラした人」以外でもありえる自分と、他者から承認されている「キラキラした人」としての自分との間で、引き裂かれることになります。そして、いつの間にか自分を偽り、見失うことになってしまうのです。

このようにして承認欲求は必然的に挫折します。ところがこの挫折は、これだけは終わらせません。

他者による承認によって自分自身を確信しようとすることは、他者を、自分自身を確信するための手段として、いわば道具として扱うことを意味します。このとき、相手は「私」にとって「私をキラキラした人として認めてくれる人」としてのみ現れ、それ以上の存在ではなくなってしまう。(中略)

ヘーゲルによれば、承認をめぐる矛盾を乗り越え、承認を実現させるためには、「私」は他者から見えている「私」のイメージを自ら捨てなければなりません。つまり、それまで他者から認識されている「私」のイメージを通して自分を確信しようとしていた「私」が、その「私」のイメージにこだわることから、自分を解放するということです。

たとえば、Instagramのなかでキラキラしている自分は自分のすべてではない、それは一つの可能性にすぎないということを、自ら積極的に受け入れるということです。

そしてそれは、自分だけではなく、他者を自由にすることをも意味します。「私」は、他者からどう見られているかを気にしなくなること、^{ほうき}「自分をこう見てほしい」「自分を認めてほしい」という他者への期待や要求を放棄し、他者をも解放することができるのです。

(「SNSの哲学 リアルとオンラインのあいだ」 戸谷洋志著 創元社 二〇二三年より)

問 SNS上の人間関係と承認欲求について、あなたが考えることを八〇〇字以上一〇〇〇字以内で述べなさい。